

対人認知における肌色と髪色の配色効果

- 色彩調和論的視点から -

早稲田大学 人間科学部 人間健康科学科 三浦 久美子 (指導教官: 齋藤 美穂教授)

1. 序

肌の白さの嗜好に着目した比較文化的研究(齋藤, 1996)⁴⁾の結果, 日本と地理的・文化的にも比較的近いと考えられるインドネシアにおいても日本同様の高い白嗜好が観察されたにもかかわらず, 肌の白さに対する評価は両国間で有意な差が認められた。これは, 肌色嗜好の構造は性差や文化差など個体要因や環境要因が複雑に絡み合っただけでなく, 変化することを示唆している。さらに, 予備調査から, 肌色の印象評価はその周辺要素にも影響されることが明らかとなった。そこで本研究では, 「髪色」に着目し, 対人認知における肌色と髪色の配色効果を検討することとした。

2. 目的

本研究の目的は, 対人認知における髪色の影響の主要因を探ると同時に, 既存の色彩調和論を基に肌色を好ましく見せる髪色との関係の法則を探ることである。また, 印象評価における属性別有意差の検討も行なう。

3. 方法

3-1. 手続き

以下の刺激及び形容詞を用いた SD 法により, 各刺激を 10 段階で評価してもらった。刺激は PC 画面上で呈示したが, その際, 画面が評価者の目線とほぼ垂直になるよう心がけた。調査は, 蛍光灯の室内にて, 2002 年 9 月に実施された。

3-2. 刺激

マイクロソフト社パワーポイントで作成した, 造作を省いた女性の顔の輪郭図のスライド 15 種類(肌色 3 種類 <Y・B・R>) × (髪色 5 種類 <Bk・rBR・yBR・gBR・bBR>)。Fig.1 刺激例 Table1 に各刺激の配色関係を示す。<>内はマンセル値。



Fig.1 刺激例

3-3. 形容詞対

大人っぽい - 子供っぽい / 知的な - 知的でない / 上品な - 下品な / 洗練された - 野暮な / 女性的な - 男性的な / やわらかい - かたい / 自然な - 不自然な / 軽い - 重い / 清潔感のある - 清潔感のない / 親しみやすい - 親しみにくい / 平凡な - 個性的な / 好きな - 嫌いな

3-4. 対象者

主に大学生 240 名(男性 117 名/女性 123 名), 順序効果を考慮し, 3 パタンの提示順序を設け, それぞれ 80 名ずつを対象とした。

4. 結果

4-1. 髪色の基本イメージ

Fig.2 は, 各種髪色の基本イメージ(各髪色における 3 種類の肌色の平均評価結果)を示したイメージプロフィールである。髪色 Bk の特異性が目に付くが, 印象傾向としては Bk と rBR に類似傾向が見出せ, 髪色 yBR, gBR, bBR の印象は近似していた。概して Bk, rBR は, 大人っぽい, 知的な, 上品な, 平凡などの印象が持たれ, yBR, gBR, bBR は, 女性的, やわらかい, 軽いといった印象に評価された。

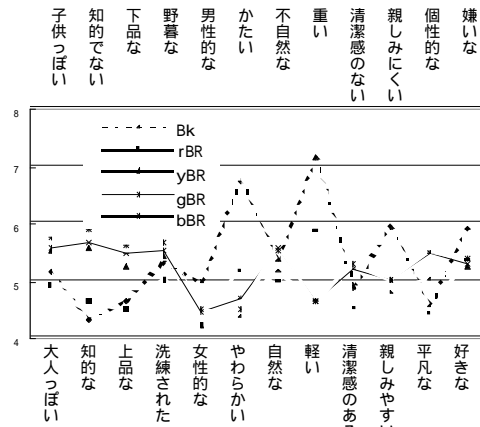


Fig.2 各種髪色の基本イメージプロフィール

4-2. 肌色との配色による付加的イメージ

肌色と髪色の配色により, 髪色の基本イメージとは異なった印象を持たれた結果も観察された。Fig.3 は例として髪色 bBR の結果を示したイメージプロフィールである。肌色 Y (ナチュラルハーモニー) やトーンオントーン配色の肌色 B では, 髪色の基本イメージに近く, 女性的な, やわらかい, 軽いなどの印象を比較的強く持たれた。一方, 肌色 R (コンプレックスハーモニー) の場合は, 子供っぽい, 野暮などの印象が持たれ, 髪色の基本イメージに対して独自の印象が付加される傾向が得られた。その他, 髪色 rBR に関しては, 髪色とのナチュラルハーモニーである肌色 Y ではやや男性的な印象であったが, コンプレックスハーモニーの肌色 R ではやや女性的な印象が持たれた。髪色 Bk は, いずれの肌色ともピコロール配色の関係であり, 全てにおいて髪色の基本イメージがより強調される結果であった。

Table1. 刺激と配色一覧

髪色	肌色	イエローベース(Y) <8YR 8.5/3.5>	ブルーベース(B) <4YR 7.0/2.0>	レッドベース(R) <4R 8.0/3.5>
ブラック(Bk) <N 1.5>		ピコロール	ピコロール	ピコロール
レッドブラウン(rBR) <10R 2.0/1.5>		類似色相対照トーン ナチュラル	隣接色相対照トーン ナチュラル	類似色相対照トーン コンプレックス
イエローブラウン(yBR) <8YR 4.5/2.0>		同一色相対照トーン トーンオントーン	隣接色相 コンプレックス	中差色相対照トーン コンプレックス
グリーンニッシュブラウン(gBR) <5Y 4.5/2.0>		類似色相対照トーン コンプレックス	類似色相 コンプレックス	中差色相対照トーン コンプレックス
ブルーイッシュブラウン(bBR) <4YR 4.5/2.0>		隣接色相対照トーン ナチュラル	同一色相対照トーン トーンオントーン	類似色相対照トーン コンプレックス

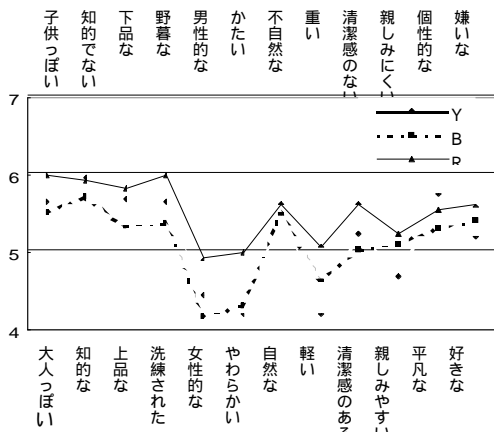


Fig.3 髪色 bBR のイメージプロフィール

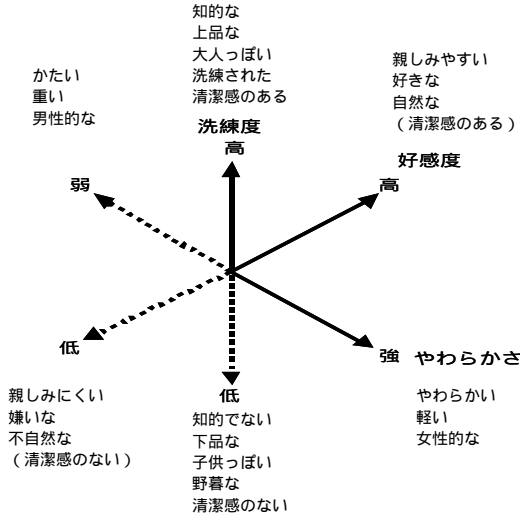


Fig.4 印象評価主軸

Table2. 分散分析結果

	SDI項目	F (4, 3546)	SDI項目	F (4, 3546)
肌色	大人っぽい - 子供っぽい	14.802**	自然な - 不自然な	1.545
髪色		15.462**		8.175**
肌色 * 髪色		7.589**		5.070**
肌色	知的な - 知的でない	24.827**	軽い - 重い	34.584**
髪色		95.608**		209.514**
肌色 * 髪色		12.383**		15.423**
肌色	上品な - 下品な	21.987**	清潔感のある - 清潔感のない	19.681**
髪色		54.040**		19.641**
肌色 * 髪色		11.491**		5.256**
肌色	洗練された - 野暮な	22.872**	親しみやすい - 親みにくい	8.440**
髪色		11.924**		32.981**
肌色 * 髪色		5.034**		5.836**
肌色	女性的な - 男性的な	20.160**	平凡な - 個性的な	3.473*
髪色		20.944**		48.802**
肌色 * 髪色		4.782**		16.048**
肌色	やわらかい - かたい	28.643**	好きな - 嫌いな	3.298*
髪色		169.211**		12.307**
肌色 * 髪色		11.159**		5.590**

+++ (交互作用)/** p<.0001,** p<.001,* p<.05

Table3. 多重比較検定結果

SDI項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
大人っぽい-子供っぽい	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
知的な-知的でない	-	*	***	***	(*)	***	***	***	***	***
上品な-下品な	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
洗練された-野暮な	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
女性的な-男性的な	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
やわらかい-かたい	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
自然な-不自然な	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
軽い-重い	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
清潔感のある-清潔感のない	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
親しみやすい-親みにくい	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
平凡な-個性的な	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***
好きな-嫌いな	-	*	***	***	***	***	***	***	***	***

*** p<.0001,** p<.001,* p<.05,(*) p<.10

A; y BR, g BR/B; y BR, b BR/C; y BR, r BR/D; y BR, Bk
E; g BR, b BR/F; g BR, r BR/G; g BR, Bk/H; b BR,

4-3. 分散分析結果

Table2 は、肌色×髪色 (3×5) の2要因の分散分析の結果をまとめたものである。肌色と髪色の交互作用は、全ての項目で0.1%水準において有意であると認められた。さらに、Table3はFisherのPLSDによる髪色の多重比較検定の結果を示したものであり、着色箇所は特に有意差が多く認められた比較結果を指す。この結果を眺めてみると、有意差は低明度の髪色 (Bk, r BR) と高明度の髪色 (y BR, g BR, b BR) との比較で多く認められたことが分かる。従って、髪色の分散は、低明度の Bk・rBR と高明度の yBR・gBR・bBR に二分される傾向にあることが明らかとなった。また、肌色に関しては、「自然な - 不自然な」以外の全てのSD項目において各種肌色間の有意差が確認された。ただし肌色 Y, R 間にはほとんど有意差は見られず、肌色 B の特異性が顕著であった。

4-4. 因子分析結果

Fig.4 は、主因子法直交バリマックス回転による因子分析の結果として得られた印象評価主軸を示す。抽出された4つの因子の中で、第3因子までの寄与率が約87%であった。3つの因子をそれぞれ「洗練度」「好感度」「やわらかさ」とした。「洗練度」は、概して高明度の髪色が、

<好感度> は低明度の髪色の得点が高かった。本調査においては、両因子得点を左右する肌色の要因は観察されていない。「やわらかさ」も踏まえ

ると、いずれの因子得点も高い刺激は <gBR + R> だけであった。この配色はコンプレックスハーモニーであり、色相対比の関係でもある。すなわち、髪色を地の色、肌色を図の色と捉えた時、肌色が、髪色の補色である「青紫」に寄って知覚されたと思われる。

4-5. 対象者属性別比較結果

Table4 は対象者の属性別に t 検定、あるいは1要因の分散分析を施した結果をまとめたものである。本調査において考慮した対象者の属性は、性、出身地、染髪の有無、性格、嗜好色である。なお、性格に関しては、対象者に自分自身の性格が外向的か、あるいは内向的かを判断させた結果を用いて分類した。

まず、性別比較結果からは、髪色 Bk に対して有意傾向が得られた。男性の方が黒髪を好む傾向にあった。

出身地別比較結果では、髪色 Bk 以外の全ての髪色において有意差が確認された。西日本出身者が暖色好み、東日本出身者が寒色好みであった。

染髪の有無別には全てにおいて 1%水準で有意差が認められた。染髪者は有彩色で高明度の髪色を、非染髪者は黒髪や低明度の髪色を好む傾向にあった。

さらに、性格別には髪色 Bk, gBR, bBR において有意差が認められた。染髪比率は、内向的な人は約 50% が非染髪、逆に外向的な人は 70% 近くが染髪していた。

嗜好色に関しては、「好きな髪の色」を答えた対象者も多かったが、性格との関連に着目するならば、内向的な人は寒色や無彩色、外向的な人は暖色を好む傾向にあった。

Table4. 対象者の属性別比較結果

		Bk	rBR	yBR	gBR	bBR
性	男/女	*	-	-	-	-
出身地	東日本/西日本	-	**	**	**	**
染髪の有無	染髪/非染髪	***	***	***	***	***
性格	内向的/外向的	**	-	-	**	**
嗜好色	有彩色/無彩色	*	-	-	-	-
嗜好色	暖色/寒色/中性色	*	*	-	-	-

*** p<.01, ** p<.05, * p<.10

5. 考察及び結論

[対人認知における髪色の影響の主要因]

分散分析の結果、髪色の分散が、低明度の Bk・rBR と高明度の yBR・gBR・bBR に二分されたことから、対人認知において、髪色の明度が印象に影響すると結論付けられよう。さらに、因子分析によって <洗練度> <好感度> <やわらかさ> という 3 つの評価軸が得られたが、<洗練度> は、概して高明度の髪色が、<好感度> は低明度の髪色の得点が高かったことから、3 つの主軸に対しても明度が影響を与えようと考えられる。

[肌色を好ましく見せる髪色]

有彩色の髪色に関しては、概してナチュラルハーモニーやトーンオントーン配色の場合、髪色の基本イメージに近い印象に評価され、コンプレックスハーモニーの場合は、髪色の基本イメージに対して独自の印象が付加される傾向が得られた。また無彩色である髪色 Bk に関しては、いずれの肌色ともピコロール配色の関係であり、全てにおいて髪色の基本イメージがより強調される結果であった。以上の結果を考え合わせると、好ましい肌色は、髪色とのナチュラルハーモニーやトーン・オン・トーン配色、ピコロール配色が、好ましくない肌色は髪色とのコンプレックスハーモニーの関係が肌色を好ましく見せると考えられる。また、予備調査の結果、最も悪い印象が持たれる傾向にあった肌色 R が、髪色 gBR と組み合わせた場合に、<洗練度> <好感度> <やわらかさ> のいずれの因子得点も高くなったという結果を踏まえると、好ましくない肌色の場合、髪色とのコンプレックスハーモニーのみならず、色相対比の効果もより深く検討する必要性が示唆されたと言える。

[印象評価における対象者属性別有意差]

印象評価における性別、嗜好色別有意差はほとんど見られなかったが、出身地別、性格別有

意差はやや見られ、また染髪の有無別有意差はかなり見られた。

性別有意傾向はわずかに認められただけであったが、女性の方が男性より色彩に敏感な傾向が得られた。

地域差に影響する要因の 1 つに色彩嗜好が挙げられる(齋藤ら, 1991)²⁾³⁾が、嗜好を左右する原因としては、以下のものが考えられる。()内は影響を与えようと思われる要素を示す。

気温：色相における嗜好差

湿度：彩度における嗜好差(水蒸気の疎密差)

日照時間：明度における嗜好差(明暗順応)

土質色：基調色における嗜好差(景観知覚)

自然光の緯度差：全体(色温度と演色性)

最も高い有意性が認められた染髪の有無別比較に関して、染髪者は有彩色で高明度の髪色を、非染髪者は黒髪や低明度の髪色を好む傾向であったことは、1 つの要因として、対人魅力の心理における「単純接触効果」(Zajonc, 1968)⁵⁾や「類似性」(Byrne, 1971)¹⁾による説明が可能である。また、内向的な人は約 50% が非染髪、逆に外向的な人は 70% 近くが染髪していたという染髪比率結果からは、染髪という行為の心理的背景も感じられた。

謝辞：本研究の調査にご協力頂いた多くの方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Byrne, D.: 1971 The attraction paradigm, Academic Press.
- 2) 齋藤美穂・富田正利・向後千春: 1991 日本の四都市における色彩嗜好(1) 因子分析的研究, 日本色彩学会誌, 15, pp.1-12.
- 3) 齋藤美穂・富田正利・山下和幸: 1991 日本の四都市における色彩嗜好(2) クラスター分析によるライフスタイルの類型化, 日本色彩学会誌, 15, pp.99-108.
- 4) 齋藤美穂: 1996 肌の白さの嗜好に関する比較文化的研究 心理学研究第 67 巻 3 号, pp.204-213.
- 5) Zajonc, R.B.: 1968 Attitudinal effects of mere exposure, *Journal of Personality and Psychology, Monograph Supplement*, 9 (2), pp.1-27.

備考：本研究は、第 34 回日本色彩学会全国大会(2003 年 5 月 13, 14 日)、及び日本心理学会第 67 回全国大会(2003 年 9 月 13~15 日)にてそれぞれ一部を発表した。後者の要旨は *Fragrance Journal* 2003 年 10 月号にも掲載された。

キーワード：髪色, 肌色, 配色, 色彩調和論, 対人認知
key words: hair color, skin color, color combination, color harmony, interpersonal recognition.